大きな魚の食べっぷり

今江祥智

新潮社

大きな魚の食べっぷり

今江祥智

大きな魚の食べっぷり　1988年7月15日印刷　1988年7月20日発行

著者　今江祥智（いまえ・よしとも）　定価1300円

発行者　佐藤亮一　発行所　株式会社　新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71　電話（業務部）03-266-5111（編集部）03-266-5411　振替東京4-808

印刷所　錦明印刷株式会社　製本所　大口製本株式会社

© Yoshitomo Imae 1988, Printed in Japan
ISBN4-10-369801-2　C0093

乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

大きな魚の食べっぷり

一　丘からの眺め……5
二　新一年生……18
三　内緒の出来事……30
四　初めての酒……41
五　切手と飛行機……53
六　自分のお金……66
七　誓約書……78
八　顔について……91
九　オオオジイチャマ……103
十　大きな玩具……116
十一　蒟蒻問答……127
十二　御招待……140
十三　男雛女雛……154

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十四　男の約束……167
十五　変身……180
十六　口頭試問……192
十七　詰問……204
十八　資本家ごっこ……218
十九　猫眼石……231
二十　帝王学……243
二十一　後見人……255
二十二　悪い夢……268
二十三　小異変……281
二十四　選ばれた者……294
二十五　死刑執行……307
あとがき……320

一　丘からの眺め

1

小学校に入るまで、仁義は自分の家に部屋がいくつあるか知らなかった。一度だけ、小学校へあがったばかりの光兄ちゃんと一緒に数えてみたことがあったが、三十いくつめかで面倒になって、ほんとは、うす暗くていやな感じの部屋がいくつもあるのでこわくなって、やめてしまった。

それよりも、小学校に入るまで、仁義は自分の家の外へ出たことがなかった。家の者も出そうとしなかったし、自分でも出ようとしなかった。仁義が家族の者と暮している「離れ」から、曽祖父たちが暮している母家の玄関まではずいぶん遠かった。外へ出るにはそこから出るしかなく、そこにいきつくまでに通らねばならない廊下は、長くてところどころ妙なふうに曲っているので、うっかり曲りちがうと、もとのところへもどれなくなるおそれがあった。仁義もむろん、何度となく迷ってしまったが、そのたびに書生（と、曽祖父ちゃまが呼んでいた）や女中（と、曽祖父ちゃまが呼んでいた）の誰かが、うそみたいにどこかからあらわれては、案内してくれた。

なんだかいつも見張られているみたいで、それに、幼いながらにも自分の家で迷ってしまうところを人に見つかるのが、くやしくも恥しくもあって、仁義はだんだん出歩かなくなった。自分が暮している「離れ」だけでも充分に広くて、仁義が遊ぶのに困らなかった。一つちがいの光兄ちゃんは、仁

義が生まれたときからいつもすぐ横にいてくれたから、遊び相手にも不自由しなかった。ふたりは、顔も背かっこうも歩きぶりまでがよく似ているので、ときどき双子とまちがえられた。（まったくまちがえなかったのは、母さんと曽祖父ちゃまだけだった。）

光兄ちゃんは気が優しくて、ふたりで子犬同士みたいにじゃれあっているうちに本気のけんかになりかけたりすると、いつも勝ちをゆずってくれた。そんなとき仁義は、

（もしかすると、ほんとはぼくのほうが兄ちゃんかもしれないぞ……）

と、思うことがあった。

けれど、光兄ちゃんはもの知りで、とし一つぶん以上にかしこくて、なんでも仁義に教えてくれた。（蟻が働き者だというのはうそで、みんなよく似ているからそう思いこむんだ、ほんとは、えさ運びなんかに一度働きに出たのは、巣にもどれば休んで二度と働きには出ないんだ……）のようなのからいろいろあって、やっぱりあちらが兄ちゃんなんだぞと、思い直すことがしょっちゅうだったもので、仁義は光兄ちゃんのことが好きで、よくなついていた。

*

そんな光兄ちゃんが、ある日突然仁義の前から消えてしまった。

ある朝、仁義が目を覚ますと、いつも横のベッドに寝ている光兄ちゃんの姿がなかった。きっと庭だ……。とっさにそう思ったのは、去年の夏、仁義よりいつも早起きの兄ちゃんが、ひとりで庭に降り、セミがからからぬけ出るところをじっと見ていたことがあったのを思い出したからだ。

とび起きて庭を見回したが、見当らなかった。

隣の部屋にも、その次の部屋にもいなかった。食事だと呼ばれてもいないのに、食堂まで探しに降りていくのは、はしたない気がして、寝室にもどってきた。そのかわり、厠（かわや）はそっとのぞいてやったのに、そこにも兄ちゃんの姿はなかった。

あれほど仲好しの兄ちゃんが、ぼくに内緒で、ぼくをほったらかしにしてどこかへいってしまう

はずがない。きっとどこかに「書きおき」のメモくらいあるだろう（むずかしい字は読み書き出来ないふたりは、いつも遊ぶ場所については暗号めいた記号がきめてあったからすぐわかる）——と、ベッドのまわりから下まで探してみたが、なんにも見つからなかった。子ども部屋へも探しにいってみたが、昨日のうちに誰かがきちんとかたづけてくれてあって、紙切れどころかちり一つ落ちてはいなかった。

（このあいだ、庭で相撲をとったとき、ちょっと強く投げとばしすぎた気がしたけど、あのことでおこってんのかな……）

それで、こらしめのためにぼくを置いて、自分ひとりでいいところへいってしまったのだろうか——と思ったりした。仁義はじりじりしながら、誰かが朝食に降りてくるよう告げにくるのを待っていた。

五分もしないうちに、仁義お気にいりの女中のおみつねえやがドアをノックして、朝御飯でございます……と、いつもとかわらぬ声で呼んだ。仁義はとび出すなり、ねえやを追いこして階段をかけ降り、食堂にとびこんだ。いつもなら家族全部が揃っているのに、今日は誰も食卓についていない。仁義は自分の席につきながら、

——父さまは？　母さまは？

と、いそがしくたずねた。

——お出かけでございます。

ねえやが御飯をつけながら答えた。くやしかったが、やっぱりきくことにした。

——兄さまは？

お出かけでございます。

ねえやが同じ口調で落着いて答えた。

（なんだ、みんな一緒なのか）

どうしてぼくだけほうっておいて——と思うとくやしくなるので、それ以上はきかないことにした。いつものようにゆっくりとよくかんで、いつもと同じだけ食べて箸をおいた。くやしがったり、あわてたりしているところを見破られたくなかった。ごちそうさまでしたと手を合せて、いつものように自分の部屋にもどっていった。

いつもならきちんとお腹に収まる朝御飯が胃袋に落着いてくれず、のどのあたりに止っているような気持ちだった。苦しくなって、ソファに横になった。

（みんな、どこへいったのかな……）

自分ひとり置いておかれたのは初めてだった。そんな大事（おおごと）（曽祖母（おおおばあ）ちゃまの口ぐせ）がおきているのに、ねえやがいつもとちっともかわらず、家の中がいつもと同じようにしんと静かなことがまた腹立たしかった。仁義は、窓を勢いよく開いた。見下ろした庭は、まるでわが家のものでなく、初めて見るような感じがした。広い庭の東すみの桜林を掃除しているのは、書生の松井だろうとわかったが、なんだか見知らぬ熊でも歩いているように見えた。仁義はのろのろと窓をしめた。もう一度ねえやなんかにきくのがいやで、きゅうに曽祖父ちゃまにききたくなった。思いこんだらなんでもすぐにやってしまいたがるたちの仁義は、ドアを開けはなしたまま母家にむけてかけ出していった。

そしてみごとに迷ってしまった。見たこともない廊下に出た。右側は大きなガラス戸がつづいていて庭が見えるから、いざとなれば、戸を開けて庭へ降りればなんとかなる。そんな思いで、めくらめっぽう廊下を走ると、とんと突きあたった。固い階段を三つ上ると、障子も襖もない部屋の入口が見えた。それが本倉の入口だと知らなかった仁義は、階段を一気にかけ上った勢いで倉にとびこんでしまった。

ひんやりと冷たい空気が、仁義の足をすくませた。目の前がいきなり暗くなったのは、倉の窓が小さいからだったが、仁義には、やにわに頭から布袋をかぶせられたように思えた。立ちすくみ、後ずさりに入口へもどりながら、ようやくのことで心を静めてあおむき、高いところにのぞき窓みたいな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ものがあることや、この部屋（とまだ思っていた）には、おかしなことに中二階があって、そこへのぼる急な階段がついていることも見つけた。それにしても気味の悪い部屋だ。仁義は、叫び出したいのをがまんし、逃げ出したいのをこらえながら、後ずさりをつづけた。何かに突然おそいかかられそうで、いきをつめていた。すると、聞きおぼえのある咳払いが、頭の上のほうからひびいてきた。

——こっほーん……。

空井戸に石を投げこんだような音にふり仰ぐと、中二階から人影が、ゆらりとゆれてあらわれ出た。曽祖父ちゃまであった。

——ほう、仁義じゃないか。こんなところへひとりできたのか。

どうして？　とはきかずに、むしろうれしそうに言った。

安心して急に気がゆるんだせいか、会いたかった人とうまいぐあいに会えたせいか、仁義はおしゃべりになった。

——父さまと母さまと兄さまがいない。一緒にどこかへ出かけたの。ぼくだけ置いて出かけたの。どこへいったのか、知ってます？　どうしてそんなことしたのか知ってます？

曽祖父は、だまって大きく二つうなずいた。そのくせ、仁義の問いかけには答えずに、ついておいでという身ぶりだけして、自分は仁義の横をすりぬけ、倉からさっさと出ていった。八十二歳とはとても思えぬ元気で大幅な歩きようだった。仁義はあわてて後を追った。

曽祖父ちゃまについてだとどうしてこんなに簡単に早く母家へいきつけるのだろうか、うまい近道でもあるのだろうか——と、仁義がいぶかる早さで、ふたりは母家の客間についていた。曽祖父は、客用の座布団を出し、仁義にすすめてくれた。一人前のちゃんとしたお客扱いであった。

——たぶんお前がよくやすんでいたから、あれらはなんにも言わずに出かけたのだね。光が初めて外へ出る日なので、あれらもついて出かけたのだね。光の通う小学校がどんなところか、どんな人間がまわりにいるものか、あれらもよく見極めておく必要があるもんでね。

曽祖父は仁義にたいして一人前の大人に言うのと同じしゃべりかたをした。決して五歳の男の子にわかりやすいようにかみくだいて言ってはくれなかった。仁義は、耳に吸いこまれていった曽祖父のことばを、自分なりにゆっくりかみくだいていくしかなかった。

あれら（父さん母さん）が兄ちゃんと一緒にショーガッコというところに出かけたらしいとはわかった。いろんな人が一緒らしいこともわかったが、肝心の行先であるショーガッコというのがなんであるか見当がつかなかったので、それだけきき直すことにした。

――ショーガッコってなに？

――一年たって来年の春、お前もいくようになるところだよ。そしたら、わかる。

曽祖父は答にならない答え方をしてすましていた。それだけ言うと自分は立上り、

――ここで待っておればよい。

とだけ言い残して、いそがしそうに出ていってしまった。仁義は立上って後を追いたかったが、そうはさせぬ大きく冷たい壁のようなものが曽祖父の背中にあるので、仁義は座りこみうつむいてしまった。

けれど、曽祖父と入れかわりのように、書生の中川が入ってきて仁義の前に大きなお盆を置いた。見ると、きれいな洋皿に大きなカステラと、かたちのいいカップにミルクが一杯入ったものが並べてあった。中川はだまって出ていき、仁義もだまってカステラを食べ始めた。ミルクはほどよいあたたかさで、これはきっと曽祖母ちゃまが用意してくれたものだと、仁義は思った。おみつねえやのは、いつも少しぬるかったし、一度だけつくってくれた母さんのは熱すぎた。母家で数度だけいただいたことがあったホット・ミルクのぐあいの良さを仁義はよくおぼえていたのである。仁義がカステラを食べおえ、ミルクを飲み干したとき、それを見ていたかのように、右手の襖があいて、兄ちゃんの顔がのぞいた。

2

兄ちゃんの顔が、思いもかけずに母家にあらわれたことにおどろいて、仁義は口がきけずにいた。朝からの、相手の勝手なふるまいについても文句を言えずにいた。仁義は、目の前の兄ちゃんを非難できずに、やっとのことであれらのことをきくことにした。

——ふたりはどこ？

——ああ、あちらの座敷でこちらに挨拶してる。報告してる。

父さん母さんは、兄ちゃんのショーガッコとかいうものについて、曽祖父母に話しているところらしい。

——ショーガッコって、なに？

仁義は、曽祖父ちゃまにきいたことをもう一度たずねてみた。

——明日から毎日通うところ。

兄ちゃんも曽祖父ちゃまと同じく、答にならない答え方しかしてくれなかった。

——今朝みたいに？

ぼくだけ置いてみんな出かけるのという意味をふくめてきいてやった。兄ちゃんはちゃんとわかってくれて、いいやと、首をふった。

——ぼくだけが通う。

——ショーガッコは家から遠い？

仁義はまたべつのことを質問した。

——うちの車でいったからよくわからないけど、かなりあった。でも、毎日途中までは車で送ってくれるらしいから、歩くのは少し。

兄ちゃんは正確に教えてくれた。

ふうん……、と鼻を鳴らしただけで、それ以上は仁義もきくのはよした。兄ちゃんもまたショーガッコというところにどんな人がいて、どんなふうになっているか話そうとしなかった。ふたりはかたくるしい感じの客間をぬけ出し、まだ話声のする奥座敷を横目に見ながら、広い玄関にまわった。

——毎朝、ここへ車がまわされるんで、それに乗っかっていくんだと……。

兄ちゃんが説明しながら靴をはき、仁義はそこにそろえてあったスリッパをはいて三和土（たたき）へ降り立った。ふたりして力をこめてそっと玄関の扉を開ける。さっき兄ちゃんたちを送って帰った車はもうとまっていなくて、かわりにゆるやかな坂がずっと下の門までつづいているのが見下ろせた。百メートルばかりもあるだろうか。両側に姿のいいユリノキが並んでいる。チューリップツリーとも呼ばれているものの巨木で、高くまでまっすぐによく育った二十メートルはあろうというものだ。昔、帆船のマストに使われたもので、船好きの祖父がわざわざアメリカから取寄せて植えさせたのが、更に育ったものだった。ふたりして手近のユリノキの下に立って見上げると、自分が蟻になったような気持ちで、ちょっとこわい。兄ちゃんはすぐに蟻から自分にもどって坂道を見下ろすところまで歩いていった。仁義も兄ちゃんのまねをして横に並んで見下ろした。ずっと下に門が黒光りして見え、そのむこうの「外」の世界は、白く明るい靄（もや）のようなものに包まれて光って見えた。

（あれが「外」か。兄ちゃんは今日あそこへ入りこんでいったんだ……）

仁義は不思議なものでも見るように、白く光る世界を眺めた。家が、街が、木が——自分の家とはちがう誰かのものであるいろんなものが、ごっちゃに溶けあって浮んでいるように見えていた……。

——雪がつもったら、ここで滑れるぞ。

兄ちゃんが突然言い出した。

——滑る？

仁義がたずねた。

——スキーでかな？　橇（そり）ではあぶないかな？

兄ちゃんが頼りな気に並べた。

——何で滑っても、そのまま門の外へとび出してしまうね。

仁義が、先まわりして心配した。そんなことよりも、ほんとは、今日兄ちゃんが出かけて見てきた「外」のことを知りたかった。どんなふうになっていて、家とどうちがうのか。どんな人がいて、家の人とどうちがうのか。しかし、兄ちゃんは何も言ってくれなかった。仁義は兄ちゃんが自分に意地悪しているように思った。

子どもだってたくさんたくさんいるにちがいない。その中には、兄ちゃんよりも腕っぷしの強いのがいくらもいるにちがいない。いざというときぼくが守ってあげなくても、兄ちゃんは大丈夫なんだろうか……。坂の下のむこうには不安の黒い花がいっぱい咲いているような気がした。けれど兄ちゃんは何も言わなかった。目を細めて坂を眺め下ろしていて、いつかそこに雪がつもるようすを空想しているらしかった。

(兄ちゃんが話したくないのなら、いいや。一年たったらぼくの番だ。自分でたしかめればわかること……)

仁義は少しばかりかたくなになり、自分だけさっさと引返し始めた。兄ちゃんがあわてたように追いかけ、玄関の扉はふたりで開けた。ふたりでなければ開きそうもない重さがあった。仁義は知らん顔でスリッパをもとの場所へもどした。玄関にある大時計を見て、その振子がゆっくりゆっくり動くのに目をやっているうちに、さっき見た外の白い街が少しずつうすれて消えていった……。

*

それきり、兄ちゃんはショーガッコのことも、外のことも仁義には何も話してくれず、仁義のほうでも、べつにもうたずねなかった。兄ちゃんが期待していた雪も、つもるほどふることもなかった。

兄ちゃんがショーガッコから帰ったあと、家の中では前と同じように時間がすぎていった。仁義が三歳になったとき以来ふたりにつけられた「先生」は、あいかわらず週に三日、家にやってきた。ふ

たりとも幼稚園にいかせなかったかわりにつけられた「先生」だったが、その石井先生は女先生でありながら、ふたりに読み書きからオリガミ、絵を描くことに、木のぼりや相撲までも指導してくれた。それも教えるということでなく一緒に遊んでくれるうちに、しぜんとできるようにしてくれた。

それというのも、ある日、祖父(おじい)ちゃまが石井先生をつれてきて、

——石井さんだよ、一緒にお遊び。

としか言わなかったものだから、ふたりともてっきり遊び相手と思いこんでしまった。この人に何かを教わるなどとは思わなかった。石井先生のほうでも、教えるような顔はしなかった。だから読み書きも絵を描くことも、みようみまねの遊びのように、つまり、木のぼりや相撲と同じにおぼえていくことができたのだった。できるようになったのだった。

石井先生は、二十五歳ということだったが二十歳そこそこにしか見えず、二年たっても少しもかわらなかった。どこの幼稚園にも一人はいる、生きのいいすてきな保母さんみたいだったから、ふたりともすぐになつき、幼稚園へいかなくても、いった以上にいろんなことを「おべんきょう」したのだった。

石井先生をつれてきたのは祖父ちゃまであったが、その祖父ちゃまに言いふくめられて、先生は、読み書きはほどほどに、遊びのほうは人並み以上になるところまでつきあってくれた。それでも兄ちゃんは、私立の幼稚園で読み書きやアルファベットまで教わってきた子よりも出来た。ただし学校では、兄ちゃんは先生にきかれるまで、自分が知っているそぶりを示さなかった。石井先生からかたくとめられていたからだ。だから友だちは兄ちゃんの実力に気づかなかった。そのぶんよけいに、兄ちゃんは学校では気が楽だった。それだからまた、兄ちゃんはショーガッコでの出来事について、弟に報告したり話したりすることがなかったのだ。兄ちゃんはのんびりゆっくりした一年生をすごすことができた。仁義もショーガッコとは、兄ちゃんが家に半日ほどいなくなるところだ——くらいに思うことにしていた。それ以上深くきくことはなしに、そのうちほんとに気にもしなくなって——一年が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com